

東アジアを見つめた
古代日本「鞠智城」

きく ち じょう
鞠智城

— 鞠智城の築城とその変遷 —



鞠智城イメージキャラクター
ころう君

熊本県教育委員会

鞠智城と古代山城

鞠智城は7世紀後半、今から約1300年前に大和朝廷によって築城された古代山城です。この当時、朝鮮半島では高句麗、百済、新羅の三国の争いに、中国の唐が加わり、緊張状態が続いていました。

660年、唐と新羅の連合軍によって、日本と友好関係にあった百済が滅ぼされます。日本は、百済の復興を支援するために援軍を送り込みますが、663年に白村江で大敗し、百済の救援に失敗しました。その結果、今度は唐・新羅連合軍による日本侵攻の脅威にさらされることとなります。そこで、大和朝廷は西日本の各地に城を築いて防衛体制を強化し

ます。こうして古代に築城された山城を「古代山城」といいます。『日本書紀』には、百済の亡命貴族が築城を指導したことが記載されています。古代山城を発掘調査すると、当時の朝鮮半島の土木技術が使用されたことが確認されています。九州では唐・新羅に備える最前線基地として金田城が築城され、大宰府を防衛するために大野城、基肄城が築かれます。それらの背後に位置する鞠智城は、防衛施設であったと同時に、食糧や武器などを前線へ供給するための兵站基地であったと考えられています。

しかし、結果として唐と新羅による日本侵攻はありませんでした。鞠智城はその後、役所的な役割を持つ施設などに変化し、10世紀半ばまで存続しました。



7世紀の日本と朝鮮半島



A: 金田城 B: 大野城 C: 基肄城 D: 鹿嶋城 E: 高安城
 ①: 長門城 ②: 常城 ③: 茨城 ④: 三尾城 (①~④は推定地)
 1: 雷山城 2: 鹿毛馬城 3: 御所ヶ谷城 4: 唐原城 5: おつぼ山城
 6: 香隈山城 7: 高良山城 8: 阿志岐山城 9: 女山城
 10: 杷木城 11: 石城山城 12: 鬼ノ城 13: 大瀬小瀬山城
 14: 播磨城山城 15: 永納山城 16: 讃岐城山城

古代山城の分布



■現在の鞠智城跡

建物の復元等、歴史公園としての整備が進められており、1300年前の姿を垣間見ることが出来ます。



■禮禮留留の像

古代山城の築城を指導したといわれる百済の亡命貴族の1人です。

鞠智城跡の遺構

鞠智城跡からは、国内の古代山城では唯一の発見例である八角形建物跡をはじめとする72棟の建物跡、銅造菩薩立像や木簡をはじめとする様々な重要遺物が出土した貯水池跡、3カ所の城門跡、土塁跡などの遺構が検出されました。

建物跡には、掘立柱建物、礎石建物があり、これらの建物は倉庫や兵舎などであったと考えられています。

また、貯水池跡では、木材を蓄えるための貯木場や、水汲み場などがみつかっています。

城門跡からは、門の礎石や石積みなどが発見されました。

土塁には「版築」という当時の朝鮮半島の先進技術が使用されていることから、鞠智城の築城にも百済の亡命貴族が関わっていたことが考えられます。



鞠智城跡全体図



■八角形建物跡 (32号建物跡)

中心に直径90cmの心柱を据え、その周囲に八角形に配置された柱が三重に巡っています。



■貯水池跡貯木場

貯木場からは、建物の建設に使う木材や、斧の柄や鋤などの木製農具が出土しました。



■版築土塁

土を何度も突き固めることで強固な壁をつくる「版築」という大陸伝来の土木技術を使ってつくられた土塁です。



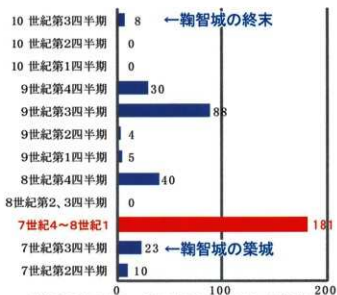
■池ノ尾門跡(水門)

鞠智城跡で唯一、石積みと水門が見つかりました。幅9.6mの石塁を谷部を塞ぐようにして構築し、防御施設としていました。

鞠智城跡出土の遺物

鞠智城跡からは、日常生活に使われた土器、建物の屋根に葺かれていた瓦、建物の建設時等に使われた木材や木製農具等の生活に関わるような遺物のほか、米を納めたことが示された荷札木簡、そして鞠智城の築城に百済の亡命貴族が関わったことを示す百済系の銅造菩薩立像など、極めて貴重な遺物が出土しています。

この中でも、人の生活と密接に関わる遺物である土器を分析すると、7世紀末～8世紀初頭のものが圧倒的に多いことがわかりました。このことから、7世紀末～8世紀初頭という時期が鞠智城に最も多くの人が駐留し、活発な活動が行われていた時期だと考えられます。



鞠智城跡出土土器の時期別数量比較（数字は個体数）



■銅造菩薩立像

やや丸みを帯びた顔立ち、三面宝冠、垂髪、天衣などがよく表現されています。へその前で舍利容器と考えられる持物を捧げ持ち、やや腹部を突き出した姿態は、横からみると優雅なS字曲線を描いています。その大きさ（12.7cm）から、念持仏と考えられ、百済の高官が築城の指導などで訪れた鞠智城に持ち込んだものと思われます。



■1号木簡

墨書で「秦人忍口五斗」と書かれている荷札木簡です。上部には左右から切り込みが入れられています。この切り込み形状は、大宰府管内の木簡に見られます。



■軒丸瓦

鞠智城跡からは、平瓦、丸瓦、軒丸瓦が出土しています。その中でも軒丸瓦には、軍弁八葉蓮華文と呼ばれる文様が施されています。この文様は、朝鮮半島の瓦の様式を受け継いでいるものと考えられています。



■須恵器（左）と土師器（右）

須恵器はロクロで成形し、窯を使用して高温で焼かれた硬質の土器です。土師器は素焼きで低温で焼かれた土器です。須恵器は固く焼きまじり水漏れしないことから、水や酒などの貯蔵具として優れていました。一方、土師器は熱に強いため、鍋、甕など煮炊きに使われるものが多く見られます。



■木製品（鋏と木槌）

木製品は貯水池跡から出土しています。建築材とともに保管されていたが、これらは粗加工までが終わったものでした。本来は、建築材を使う際に最終的な加工を施し、工具として使用する予定であったものと考えられます。

鞠智城の変遷

鞠智城跡の発掘調査成果から、鞠智城が7世紀後半から10世紀中頃までの約300年間存続し、時代に合わせて城の機能が変化してきたことが明らかになりました。それにより、鞠智城の存続期間を大きく5つの時期に分けることができました。

ここでは、鞠智城がどのように変化していったのかについて、各時期ごとに解説します。

鞠智城Ⅰ期（7世紀第3四半期～7世紀第4四半期）

鞠智城の創建期です。白村江の敗戦により、唐と新羅の侵攻に備え、築城されます。掘立柱建物の倉庫や兵舎が建てられ、3箇所³の城門、土塁線、貯水池など、城としての最低限の機能が緊急的に整備されました。また、百済系の銅造菩薩立像の存在から、築城にあたっては百済の高官が関与したと考えられます。



■復元建物（左：兵舎、右：板倉）

どちらも鞠智城Ⅰ期の建物です。兵舎は3間（7.8m）×10間（26.5m）の長屋風の建物で、約50人の兵士が寝泊まりしていたと考えられます。板倉は倉庫であったと考えられています。

■南側土塁線

自然の尾根を削り、そこに版築という朝鮮半島の土木技術で土を盛って、土塁が構築されています。

■木組遺構

貯水池跡につくられた木材を組んで囲い、1箇所¹に石段を設置した水汲み場です。



鞠智城Ⅱ期（7世紀末～8世紀第1四半期前半）

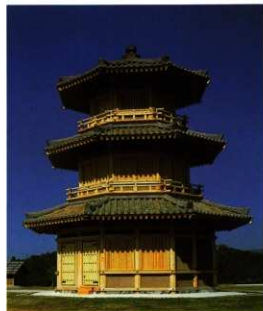
鞠智城の隆盛期です。鞠智城Ⅰ期の建物に加え、城を管理する建物や八角形建物など、城内の施設が最も充実した時期です。『続日本紀』に記載のある、鞠智城の修繕記事の時期にあたります（698年）。

出土遺物を見ると、土器などの日用品はこの時期のものが最も多く出土しています。そのため、城の管理・運営に多くの人員が配置された時期であったと考えられます。



■大型掘立柱建物跡
（63号建物跡）

3間（5.85m）×7間（16.8m）の建物跡。役所のような施設で、城を管理する建物であったと考えられます。



■復元建物（八角形鼓樓）

鞠智城Ⅱ期の建物跡である八角形建物跡（南側）を、様々な検討を基に復元した姿です。鞠智城のシンボルとなっています。

鞠智城Ⅲ期（8世紀第1四半期後半～8世紀第3四半期）

鞠智城の転換期にあたります。それまでの掘立柱建物が礎石建物に建て替えられていきます。鞠智城Ⅱ期にできた城を管理する建物や八角形建物は存続しています。

しかし、この時期の土器などの日用品はほとんど見あたりません。このことから、施設を存続していくための必要最低限の人員のみを配置するなど、城の管理・運営になんらかの変化が生じた時期と考えられます。



■大型礎石建物跡（49号建物跡）

鞠智城Ⅲ期に出現する礎石建物です。3間（7.2m）×9間（21.6m）の建物で、長倉と呼ばれる倉庫であったと考えられます。

鞠智城Ⅳ期（8世紀第4四半期～9世紀第3四半期）

鞠智城の変革期です。城の機能が大きく変容します。城を管理する施設がなくなり、貯水池中心部では貯木場などが埋没し、その機能が低下します。また、礎石建物は大型化し、米などを納める倉が多く建ち並んでいたようです。

なお、『文徳実録』によると、天安2（858）年に鞠智城の米倉11棟が焼失したとの記載があり、それを思わせる炭化米や焼けた痕跡のある礎石も発見されています。



■炭化米

鞠智城Ⅳ期の米倉と考えられる礎石建物の周囲からは、炭化米が多量に出土します。これは米倉が焼失したという文献の記事を裏付けるものと考えられます。



■上：20号建物跡、下：20号建物跡を復元した米倉
鞠智城Ⅳ期の建物で、3間（7.2m）×4間（9.6m）の礎石建物です。この時期には、同規格の建物が規則正しく配置されています。



■59号建物跡

周囲に溝を持つ礎石建物です。大事なものを保管していたのかもしれない。建物の入口部分は溝が途切れています。



■12号建物跡

5間（11.5m）×6間（13.2m）の礎石建物の周りを掘立柱で囲んだ、礎石・掘立柱併用の建物です。

鞠智城Ⅴ期（9世紀第4四半期～10世紀第3四半期）

鞠智城の終末期です。建物数が減少し、機能は低下しますが、858年に焼失した米倉を再建するなど、食糧の備蓄施設としての機能は存続しています。しかし、10世紀の第3四半期頃には、鞠智城は完全に城としての役割を終えます。

鞠智城へのアクセス



- 「阿蘇くまもと空港」から車で、約40分
- 「九州新幹線新玉名駅」から車で、約60分
- 「植木I.C.」から車で、約25分
- 「菊水I.C.」から車で、約45分



- 「熊本交通センター」から菊池温泉行きバスで、約60分
- 「菊池プラザ」下車後タクシーで、約5分
- 「熊本駅前」から菊池温泉行きバスで、約75分
- 「菊池プラザ」下車後タクシーで、約5分



- 山鹿市街からは【山鹿市あいのりタクシー/0968-46-6340】
- 菊池市街からは【きくち観光あいのりタクシー/0968-26-5022】が運行しています。いずれも予約制ですので、電話でお問い合わせください。

- 開園時間：公園は年中無休、入場無料です。
- 温故創生館 鞠智城について学べるガイダンス施設です（入館無料）。
閉館時間：9：30～17：15（入館は16：45まで）
休館日 月曜日（祝日の場合は翌日）および12月25日～1月4日まで
- 駐車場：普通車70台、障害者用スペース3台。大型バス駐車可能（無料）。
- ボランティアガイドによる解説をおこなっています（2週間前までに要予約/無料）。
- 車いす、ベビーカーの貸し出しをおこなっています（数に限りがあります/無料）。



皆様のお越し
お待ちしております!!



鞠智城イメージキャラクター
ころろ君

お問い合わせ

熊本県立装飾古墳館分館
歴史公園鞠智城・温故創生館
おんこそうせいかん
〒861-0425 熊本県山鹿市菊池町米原443-1
TEL. 0968-48-3178
FAX. 0968-48-3697
<http://www.kofunkan.pref.kumamoto.jp/kikuchijo/>



鞠智城HP

- このパンフレットは、昭和42年度から実施した鞠智城跡の発掘調査成果を総合的にまとめた『鞠智城跡Ⅱ』の内容を、わかりやすく紹介するために作成したものです。

この電子書籍は、鞠智城 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版は発掘調査報告等、他の書籍から引用してください。

鞠智城跡の発掘調査報告は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：鞠智城

鞠智城の築城とその変遷

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦 2024 年 9 月 15 日